

日常的着物着用者(女性)の着物着用実践のありかたと着物に対する意識

東 朋 美*・森 理 恵**

Theory and practice : Japanese women wearing 'kimono' in daily life

TOMOMI AZUMA* and RIE MORI**

要 旨：日常的着物着用者が「なぜ着物を着るのか」ということを調査した結果、それぞれの着用者は、現代の着物の問題点を次のように克服していることを明らかになった。価格と販売方法については呉服店と親しくなることや古着店や骨董市、ネットオークションを利用すること。着付けや手入れのむずかしさについては、同じく呉服店と親しくなることや、近所に洗い張りの専門家を見つけること、着付けや手入れの技術を習得した母や祖母の身近にいること、和裁などを習得して自分で技術を身につけることである。とくに古着を着用する場合には、いつでも利用できるメンテナンスの方法を確保することが必須となる。着物のルールについては、わずらわしいと感じるより、着物特有のしきたりを身につけることで自分を高めようとする意識が見られた。友人のネットワークが日常的な着物の着用と関係していること、着物の「伝統文化価値」が着用者にとって着物の魅力となっていることも明らかになった。

(2008年9月30日受理)

1. はじめに

1.1 研究の背景と目的

本研究では、現代、晴れ着としての位置づけをされている着物⁽¹⁾を、日常着として着用する着物着用者(以下「日常的着物着用者」とする)に着目し、現代の着物が置かれている状況の一端を明らかにすることを目的とする。

着物は、現代では晴れ着として着用される場合がほとんどで、日常着としての必要性は薄くなっている。特に若者にとっては成人式、卒業式、結婚式などの晴れ着としてのみの認識が強まり、日常着として着物を着用する人はほとんど見られない。しかしその一方で、「浴衣ブーム」と言われるように、浴衣が夏のおしゃれ着として盛んに着られ、定着する傾向にある。

着物は洋服とくらべると、着るのもしまうのも手がかかり大変である。まず着物を着るためには着付けの技術が必要であり、そのコーディネートにも格、季節などさまざまなルールがある。また、洗い張り、しみ抜きなどのメンテナンスにおいても手間がかかり、洋服にくらべ

れば高価で面倒である。これらのことが、現代の人々が着物を日常的に着なくなっている原因であると考えられる。また、着物にくらべてこれらの負担が比較的少ないことが、浴衣が盛んに着られる一因である。

このような状況のなかで、あえて日常的に着物を着て生活する人が存在するのはなぜだろうか。本研究ではこの点に着目し、洋服が日常着として定着している社会において、日常的着物着用者は着物のどこに魅力を感じ、なぜ着物を着て生活しようとするのか、実際にどのようにして日常的な着物着用を実現しているのか、などについて明らかにしていく。なお、女性と男性とでは、着付けの煩雑さや、マナーやしきたりの複雑さ、販売価格帯に大きな違いがあるため、今回は、日常的着物着用者のうち、とくに女性に限定して研究をおこなった。

1.2 先行研究と本研究の特色

着物に関する実態や意識を調査した研究として、川口ら(1986)、河村ら(2001)、赤澤ら(2001)、北村(2005)などが挙げられる。

川口ら(1986)は、九州北部地区において、着物の初

*株式会社ヨシモト工房企画部

Yoshimoto Kobo Inc. Planning Department

**京都府立大学生命環境科学研究科服飾文化史研究室

Laboratory of Cultural History of Clothing, Graduate School of Life Environment, Kyoto Prefectural University

期ユーザー「女子短大生・女子大生」と、買い替えユーザー「その母親」の2世代調査をおこない、両世代ともに、着用機会はフォーマルな場が多く日常の着用は少ないこと、晴れ着としての着物の着用を望み、日本の伝統衣装としての認識が高いことを明らかにしている。

一方、河村ら(2001)は、平成5年を除く昭和56年から平成11年の19年間にわたる、女子大生の和服の知識と認識に関する調査研究である。和服に対する興味はほとんどの学生が「ある」と回答し19年間で変化はないが、和服の知識については平成4年から減少傾向であること、日常着としての認識が減少し、次第に非日常で晴れの衣装という認識が一般的になってきていることが明らかにされている。

また北村(2005)は、東京都に住む10代から80代までの女性を対象とした調査で、全体の80%が「きものが好き」と回答する一方、価格、販売方法、着付けや手入れのむずかしさなどの点でほとんどの回答者が不満を持っていることを明らかにしている。

これらの先行研究が、着物を着る人着ない人を含めて調査をおこない統計的な数字を示し、一般的な傾向を知ろうとしているのに対し、本研究は、現代社会においては少数派である日常的着物着用者にとくに着目し、その実践のありかたと意識を明らかにしようとする点に特色を有する。ただし、調査をおこなうことのできた事例は多くはなく、日常的着物着用者の全体像を示すものではない。しかしながら、日常的着物着用者のさまざまな実践のありかたと意識を知ることにより、北村(2005)で挙げられている着物の欠点、すなわち価格、販売方法、着付けや手入れのむずかしさが、現代の日常生活において、どのように克服されるのかを明らかにすることは、現代の着物を考える上で非常に有意義であると考えられる。

1.3 研究方法

日常的着物着用者の実践のありかたと着物に対する意識を知るため、日常的着物着用者による著書、ブログを調査するとともに、日常的着物着用者に対してインタビュー調査をおこなった。著書においては職業的、経済的に限られた階層の人が対象となってしまうが、ブログ、インタビューを用いることで、より幅広い階層の事例を調査できた。

調査対象は、フォーマルな場のみでの着用ではなく、在宅時、外出時など日常的に着物を着る者とする。また職業として着物を着用している者(呉服販売、和食店等)は除く。着用頻度においては特に制限しない。調査対象とした著書、ブログ、インタビューは以下のとおりである。

調査対象

著書

①通崎陸美(2002)『天使突き抜け一丁目』淡交社

②永田萌(1993)『京都・着物暮らし』河出書房新社

③大橋歩(1994)『着物は楽しい』文化出版局

④林真理子(1992)『着物の悦び』新潮社
ブログ

①「きもの暮らしの城」

<<http://www008.upp.so-net.ne.jp/fusencyou/>>
(2007/12/29 アクセス)

②「アンティークキモノ生活のスズメ」

<<http://plaza.rakuten.co.jp/petitlapin0314/>> (2007/12/29
アクセス)

③「着物でトコトコ」

<<http://blog.livedoor.jp/minitoko307/>> (2007/12/29
アクセス)

④「桃葉の着物日和」

<<http://yaplog.jp/momoha611/>> (2007/12/29 アクセス)

インタビュー

①Aさん 2007/8/9, 13:00～阪急茨木市駅周辺にて実施

②Bさん 2007/8/21, 16:00～阪急烏丸駅周辺にて実施

③Cさん 2007/8/21, 16:00～阪急烏丸駅周辺にて実施

④Dさん 2007/8/23, 13:00～近鉄大和西大寺駅周辺にて実施

⑤Eさん 2007/9/11, 14:30～阪急烏丸駅周辺にて実施

調査項目は次のとおりである。ただし、すべての調査対象についてa～eすべての項目を明らかにできたわけではなく、一部にとどまったものもある。a～cは主に着物着用実践のありかたについて、d、eは主に着物に対する意識についての項目である。

調査項目

a. 着物を着るようになったきっかけ

現在に至るまでの着用経験、家庭環境など。

b. 実践について

着付けの習得方法、購入方法、どのようにメンテナンス(洗い張り、仕立て、染め替えなど)をおこなっているか、着こなしについて、失敗したこと、成功したことなど。

c. 周囲の反応

家族の反応、外出時の様子など。

d. 着物の魅力

e. 現代の着物のあり方に関して

2. 結果

2.1 エッセイ

※年齢、職業、住所は出版時のものである。

①通崎陸美「天使突き抜け一丁目」

35歳、マリンバ奏者、京都市在住

著者は京都生まれ、京都市育ちで、地元人しか知らないような京都、そこでの古着を中心とする着物生活について書かれている。オリジナルの着こなしで着物生活を楽しんでいる様子が読み取れる。

a. 着物を着るようになったきっかけ

父親が京都の女の子らしく育てたいという思いを持っていたため、着物を着る機会も多かった。みんなと同じことをするのが嫌な性格だったために、十三参りにいやいや連れて行かれたことを境に着物を着なくなる。20代半ば、おばの形見の着物に出会い、着たいと思ったことから着物を集めていくが、意識はしていないものの、着たいものを集めると、なぜか昭和初期のものが中心となる。

b. 実践について

幼馴染と近所の女性の元で着付けを習う。初めはわからないことが多く、教わっても多くのことを忘れてしまうが、段々しなくてもいい、なくてもいいと思ひ、自分流の着付けが出来上がった。着始めた頃は周りの意見や、着物のルールにとまどったが、そうやって右往左往することが嫌になり「気持ちのいい格好」で出かけると決めてからは楽しく着られるようになった。

古着屋を中心に購入しているが、その店の店主は自分と趣味が合い、好みをわかってきている。似合わない時ははっきり似合わないと言ってくれる人である。古着屋の他に骨董市でも購入しているが、段々と着物以外の古物も集めるようになる。

着物で自転車に乗ることもあり、袖の長いものを避け、スタンドを立てるときなど足元に注意すればむずかしいことではない。

外出着らしい浴衣スタイルとして「浴衣に足袋」、Tシャツ・ステテコの上に男物の着物を羽織った気軽な「ステテコスタイル」など、自分流のコーディネートで着物を着こなししている。

メンテナンスにおいては近所の「おばちゃん」がお抱え和裁士となり、寸法直しから洗い張り、仕立てまで面倒を見てくれるので古着生活が成り立っている。

c. 周囲の反応

洋服をわざと着崩した時に、だらしがないと注意を受けても気に留めないが、着物は年長者にネガティブなコメントをされるとギクッとす。

d. 着物の魅力

古着の着物の中には美術の専門家が依頼されデザインしたようなモダンなものがあり、「名もないところ」が魅力の古着ではあるが、自分の所持していた帯が、実は構成主義の芸術家によって描かれたものであったとわかった時に興奮し、所持している他の着物についても調べてみた。

②永田萌「京都・着物暮らし」

43歳、イラストレーター、京都市在住

着物初心者時代の多くの失敗談、そこから学んだ教訓などが書かれている。着物への憧れや理想と、それに対する多くの失敗談は、着物を着てみたいという人たちの抱く「着物を着る」という現実に近いものがある。

a. 着物を着ようになったきっかけ

自分の絵をモチーフにした着物を作っていたメーカー

の仕事もしていたが、着物は「時間も着ていくところもたっぷりある贅沢な人のもの」と決めつけ、自分で欲しいとも思わなかった。しかし知人について行った呉服の展示会で着物をローンで購入してしまい、元を取るには着るしかないと考え、京都という土地柄も後押しし、それ以来、着物を着るようになった。

b. 実践について

着始めた頃は一人で本を見ながら着付けてみるが、言葉の意味さえわからず全くできなかった。週1回のペースで着付けを習うが、自分だけの着心地のいい着方というものを、着て慣れることによって身につけた。

親しくなった呉服屋に自分でデザインしたモチーフを刺繍してもらったり、好きな色に染めてもらったりと、呉服屋との付き合いが着物生活を楽しむ鍵となっている。

そそっかしくてうかつな性格のため、洋服の時は脱いだ服は脱ぎっぱなし、小物も出しっぱなしということが多いが、着物に関しては、着用後は必ず風に当て、綺麗な和室でたたみ、箆筒へしまうということをおこなう。また汚してしまった時は呉服屋へ持っていくようにしている。

着物で旅行をしようと試みるが、荷物が多くなる、着付けの時間が十分取れない、破れてしまった時の処置ができない、宿の部屋に姿見がないなど、多くの失敗を重ね、初心者には着物で無理なことをしてはいけないと、たくさんの教訓を得る結果となった。

c. 周囲の反応

京都の呉服問屋の並ぶ古い街に住んでいるため、着物を着た日は周囲の視線が気になり、出歩くことすら苦勞した。しかし着物に慣れ、楽しむことができるようになると、山のようにいる着物人の中で自分ひとり目立つわけがない、逆に京都ならごく普通に着物を着て楽しむことができるようになる。

d. 着物の魅力

公の場に出るときは洋服よりも着物のほうが評判がよく、黙っている限りおしとやかに見られることが多い。

四季折々の柄の着物は着られる期間も短く贅沢なものだが、季節が巡るたび「もうすぐあの着物が着られる」という楽しみがある。着物を仕立てるときやコーディネートする時に自分の中で物語を作ることができる。

③大橋歩「着物は楽しい」

54歳、イラストレーター、東京都在住

着物は着てみたいけれど、という気持ちのある人に向けて着付けの方法から、帯、小物の選び方、着物のルールについてなど、イラストつきでわかりやすく書かれている。

a. 着物を着ようになったきっかけ

戦後に幼少期を過ごし、洋服は更生服、たまに着せてもらう着物も大人が着古した着物を仕立て直したものがわりであった。しかし、それでも着るものが大好きだっ

たため、着物は幸福のもとであった。美大に入学しファッションにおいても刺激的でますます着るものが好きになった。イラストレーターという職業上、プラスになると思い流行の服を追っていたが、段々と洋服が豊かになり困惑し疲れが出る。その頃から着物を着ようになる。

b. 実践について

子どもの頃に着ていた経験があり、自主的に着たいと思った時に困ったことはなかった。

友人に呉服屋に連れて行ってもらい選ぶ楽しみを知り、その呉服屋のことが気に入るが、見た目も悪く金持ちでもなかったため、その店からはあまり歓迎されなかった。何とか買える着物を数年かけて手に入れていき、購入した着物を着てその呉服屋を訪れることで自分というものを理解してもらう。それ以来、呉服屋さんも少し親切になり、好みの着物を出してもらえるようになった。

c. 周囲の反応

着物についてあまり知らないときは、おもしろいコーディネートでじろじろ見られることも多い。しかし、着物に詳しくなってくるほどそんなおもしろいコーディネートができなくなり、つまらないと感じることもある。

d. 着物の魅力

人によって似合うものが違うので、柄の選び方や帯の合わせ方で自分らしさを出す、などと、洋服とは違った楽しみ方があるが、洋服で流行を追い、色やバランスの感覚ははっきり決まっているため、洋服の感覚で自分らしいものを着るようにしている。仕事、家事のやりやすさを考えれば洋服より優れているものというわけではないが、着る楽しみがある。形、素材、色・柄、バランス、すべてにおいて長年かかってきた日本の文化であるため、日本人として楽しみたい。

形やスタイルは変わらないものなので10年、20年着ることができる。手と顔しか見えないため一番自分らしさが出る衣服である。ごまかしはきかないがそれが自分の生き方につながると考えている。

e. 現代の着物のあり方に関して

現在成人式で見られる振袖は、スマートに見せるためなのかペラペラの生地が多いが、体のラインが強調され逆効果である。また洋服デザイナーの名前を貸しただけのもの、濁った色の振袖は若い人に着物というものを歪んで受け取らせてしまっている。初めて着物を着るといった人たちが多い機会であるため、着物はこういったものだと思込ませる原因になっている。

④林真理子「着物の喜び」

38歳、小説家、東京都在住

着物の文化、普及に貢献した人に京都市より贈られるグレース大賞の受賞経験もある。着物を着るに当たっての注意点などが書かれているが、最も大切なのは呉服屋選びであり、よい店に出会うことがよい着物につながるとしている。着物が今後発展、普及していくための解決策も挙げられている。

a. 着物を着ようになったきっかけ

20代の頃は成人式の着物以来ほとんど着用機会のないまま過ごす。雑誌の撮影などでまれに着物を着るときもあったが、今後一生、着物と付き合うことはないと思っていた。30代、西陣の帯屋の若旦那と知り合いになり、結婚式に着ていく着物を作ってもらったことがきっかけで着物に興味を持つ。友人と見に行った呉服屋が、自分の好みのものが多く個性的な着物ばかりであり気に入ったことから、その後ずっとこの呉服屋との付き合いが始まり、着物生活を送ることとなる。

b. 実践について

展示会は着物を売りつけられたり、欲しいものに会いついローン組んでしまったりという話を聞くが、まず行ってみたいと皆さんの着物を見ることが大切。呉服店でも同様、着物についていろいろなことを聞いてみる。

帯び合わせは着物を着るという中で最もむずかしいことで、数えられないほどの失敗を繰り返した。しかし、ルールとは数年で変わってしまうものなので、とらわれず着る楽しみの一つとしている。

着物を着るために、お茶、日舞を習い内面から自分を変えていった。

c. 周囲の反応

今の時代、一人着物を着て出歩くことは注目を浴びて恥ずかしい。しかし着物友達を作ること、気楽に着物で出かけられる。着物姿であればレストラン、ブティック、喫茶店、どこでも歓迎される。

着物人が多く集まる場にはあえて着物で行く。着物を着るにあたって競い合うということは避けられない。お互い着付けや着こなしにチェックが行くが、その緊張感に着物特有のものである。着物姿は一種のパフォーマンスで公共性を帯びるため、注目を浴びてしまう。

d. 着物の魅力

着物での醍醐味は二つあり、一つは着終えた時、もう一つは着る前にいろいろ思案する時である。コーディネートを考えたり、友人とどんな着物を着ていくか相談したりと、洋服より思案が多い分、着物のほうが奥深い。

日本の古くからの色の名前、西洋にない色を知ることができるということも着物の楽しさである。着物は教養であるので、頭やセンスがなかったら着こなせない。若い女の子と洋服で勝負しても勝てないが、着物は着こなす次第で、20歳の女の子より70歳のおばあさんのほうが美しいということもありえる。

e. 現代の着物のあり方に関して

今の若い人は着物=高いというイメージしか持っていないが、着たいと思っている人もたくさんいる。呉服店は敷居が高く昔ながらのしきたりが残っている場所であり、いいものが置かれている呉服店で着物を見ることすらできない。着物業界の閉鎖的なイメージを払拭し、若い人の着たいという気持ちを汲み取らなければ着物の存続は危ぶまれる。

2.2 ブログ

※年齢，職業，居住地はブログ開設時のものである。

①「きもの暮らしの城」

40～50代，インターネット関係，熊本県在住

365日24時間着物で暮らすという人のブログ。日々の着物のコーディネート写真付きの日記，着物仲間とのやり取りが見られる掲示板の他に，自分の着物に対して抱くポリシー，身体障害者，高齢者など身体にハンディキャップのある人たちに対しておこなわれる，NPO主催の日舞体験の告知などがある。

a. 着物を着ようになったきっかけ

幼少の頃から着物を着せてもらうことの多い生活であった。母，祖母も着物を着ており，お茶，踊り，和裁なども習っていたため着物に触れることに違和感はないようである。洋服の場合，体型などの問題から人から褒められるということはなかったが，成人式で着物を着た時，初めてたくさんの人から賞賛を得た。着物はそれ以前までに着慣れていたため周りの者より立ち居振る舞いが際立ち，コーディネートも悩んで考えつくしたものだったからだと考えている。「1日1回着物を着る生活」から「365日24時間着物で生活」するに至ったのは，袴を手に入れたことでバイクにも乗れるようになり，それ以前バイクに乗るために着ていた洋服が要らなくなったからである。

b. 実践について

1日に着る着物は3枚，朝起きて着る自宅用の生活着（ポリエステル，木綿，ウール），出勤用の外出着（小紋，紬），仕事用の仕事着（木綿，ポリエステル）である。これに更に喪服や留袖，訪問着などのフォーマルな着物が加わる。自分の生活に合わせた着物なので留袖や訪問着より小紋や紬の着物が多い。また24時間着物を着ようになってポリエステルや木綿の着物が多くなった。これらの着物をしまう際，畳紙に入れてしまうものは小紋，訪問着のみで，主に生活着は三つ折りなどして洋服のように箆笥にしまっている。また帯も普段使用であれば丸めて籠に入れている。

着付けは習っていないが，母が毎日厳しくチェックするためいつも気をつけている。家事をおこなうとき，バイクに乗るときなどは楽な着付けを一番とするが，出勤や外出の時は着付けに最も気を使う。着物や帯はお金をかけて手に入れるものだが，着付けや立ち居振る舞いは自分で身につけられるもので，それだけで着物をよく見せることができる。生活着とおしゃれ着で着方が変わることは洋服も同じである。

和裁を習得しているため，端切れで裏をつけたり，使わなくなった浴衣でもんぺを作ったり，デニム地で着物を作ったりしている。

c. 周囲の反応

結婚以前より着物を着て生活していたため，24時間着物生活に移行したときも夫は何の抵抗もなかった。マ

ンション暮らしのため，着付けに広いスペースをとることだけが不満なようである。またマンションの住民はみんな着物で生活をしていることを知っているため，周囲の目が気になることはない。「普段，着物を着ると何か言われるから」とよく耳にするが，普段着らしいコーディネートにすれば生活の中で違和感を持たれないのではないかと考えている。

e. 現代の着物のあり方に関して

現在の着物事情では留袖，訪問着が多く流通しているが，生活のワードローブとしてそれほど着用機会がないものは必要がない。着ている時間が長い衣服ほど必要枚数も多くなる。

②「アンティークキモノ生活のススメ」

20代，美容師，愛知県在住

着物はむずかしくて着るのも手間がかかる，着たいけれども着られないという人に向けてメッセージが書かれている。着物の堅苦しいイメージを振り払うための雑誌やリサイクルショップが紹介されており，和裁専門学校，着付け教室で学んだ着物の知識も触れられている。

a. 着物を着ようになったきっかけ

和裁士を志し，和裁の専門学校へ入学。その後，美容専門学校を卒業し美容師となる。着付け教室にも通い着付けの師範免許も取得した。着物が好きで着物関係の仕事がしたいという思いと，ものづくりが好き，教えることが好きという思いから，美容院の仕事で着付けを教え，個人で着付け教室も開くことになる。

アンティークな柄の着物が好きなこともあり，近所のアンティークショップとの出会いが着物生活に大きく関わっている。また，初めて骨董市を訪れた時に着物の安さに驚き，洋服が高くて買えないと思うこともあった。

b. 実践について

和裁専門学校で学んだことを活かし，自ら半襟，足袋，着物を製作，着用している。着用の際はほとんど外出時で，京都へ着物のみで旅行に行ったり，着付け教室で教えた生徒と着物で食事に行ったりしている。着付け教室で着物の季節や格などの知識は一通り習得しているために着こなして苦労するという事は見られないが，自分なりの着物の着こなして自由に楽しんでいる。

もともと家に自分のために誂えてもらった着物や母の着物があったが，現在はほとんどの着物をアンティークショップや骨董市で購入している。古着の着物は破れやシミなどの傷みが多いがあまり気にせず，破れ，袖丈，裾丈など自分でできる範囲で修復して着用している。

c. 周囲の反応

大正ロマン風の派手な着物を着ることが多いため，すれ違いざまにじろじろ見られることもある。どのような気持ちで見られているのかがわからないので複雑な気分になる。しかし，着付け教室を開く際にチラシをおいてもらえるよう様々な店舗をまわった時，着物のほうが第一印象がいいようで信用されていると感じる。

d. 着物の魅力

着物を着たいという気持ちは、女性特有の変身願望からきているもので、洋服とは違ったコーディネイトを楽しんでいる。半襟、帯締め、帯揚げなど小さな面積の配色で全体の印象を大きく左右するところがあるため、おもしろく、奥深くもある。

③「着物でトコトコ」

26歳，デパート勤務，東京都在住

着物の経験は浅く、ブログ内で書籍やインターネットで得た知識を紹介しながら着物初心者の人たちとともに着物を学んでいこうという内容。

a. 着物を着るようになったきっかけ

素敵な大人の女性になりたいと思い、そのイメージが「日本の伝統を身につけた人」だった。大学時代からお茶を習っていたため着物を着る機会があったが、面倒で年に2、3回しか着用していなかった。23歳になったことを機に着物を着てみようと思決心する。着物は高額なものだと思っていたがリサイクルショップで安い着物に出会い、思い切って購入を試みる。購入した一枚から着てみたいコーディネイトが広がり、それ以後、着物を集めて着用するようになった。

b. 実践について

着付けは独学で、雑誌や本の着付け方法を見ながら自分で練習している。お茶の稽古に行く時は必ず着物を着るようにし、食事や買い物、インターネット上で知り合った着物仲間との外出など、月に2～3回着用している。外出時に着崩れるようなことはないが、外出前に着付けている際に時間が間に合わなくなり、苦勞して着付けても気に入らず、結局洋服で出かける時もある。着物はもうこりごりと思うこともしばしばあったが、着慣れてくると自分なりの着方やコツがつかめてきた。

呉服屋は敷居が高く入れないが、ショッピングセンターや着物専門チェーン店は気軽に入って見ることができる。しかし購入はほとんどリサイクルショップでおこなっている。他にも母の嫁入り道具の着物や祖母、曾祖母の着物も所持している。

母自身は着物を着られないのでわからないことがあればお茶の先生やブログ上で質問している。外出時も着物を着ることに違和感はありません着崩れた経験などはない。同年代で着物を着用している人は格やルールにこだわらず自由な着こなしをしていてとても面白いと思うが、自分が着物を着るときはきちんとした着こなしをきまりを大切にしようとしている。

c. 周囲の反応

着物で外出しても周囲の視線などはそれほど気にならない。街でも着物姿の若い女性を見かける機会は多い。着慣れていないために着崩れている人に眉をひそめる人もいるが、まずは着てみて、失敗してもそこから学べばいいと思っている。

d. 着物の魅力

洋服より断然動きにくく、動きに気をつけないといけなことが面倒だが、そうすることによって所作が美しくなる。古典文学やお茶など日本的なものへの憧れが強く、特に着物はその一つとしてぜひ身につけたいものだと考えている。

④「桃葉の着物日和」

30代，主婦，大阪府在住

にほんブログ村，ファッション，着物・和装ブログ部門で人気No. 1のブログ。着物のコーディネイト，主催する着物のイベントの告知など着物のことを主体に料理，ガーデニングのなどの日記も書かれている。

b. 実践について

「お出かけ着物生活」を心がけ、外出時はほとんど着物である。食事、買い物、美術館、落語など趣味の場での着用が多い。着物で海外旅行の経験もある。洋服は家の中や近所の散歩用のものくらいしか購入していない。アンティークの着物が好きだが身長が高いため自分では着られない。帯が好きなのでアンティークものでも帯を中心に購入している。自分の手持ちのものに合わせて選ぶのではなく、気に入ったものを購入するようにしているが、そうすれば最終的には必ずじっくりとくる組み合わせが多く、また意外なものにも似合うことがあり、発見や驚きがある。アンティークショップで気に入ったものをたくさん購入し、それをインターネットオークションに出品もしている。

メンテナンスは夏物の洗濯や染み抜きなど、できるものはほぼ自分でしている。

家事の時は着物の上に割烹着、就寝時は浴衣など場面に合わせて着用を使い分け、なるべく着物を着ている時間を増やすことで、所作や立ち居振る舞いを身につけるようにしている。

着付けは以前に習ったことがあり、今では友人に教えている。着付けを習い始めた頃は、着物のルールもあまり知らなかったためいつも先生に質問していたが、今はほとんど普段着の着物しか着ない生活なので、遊びのある着こなしで問題ない。季節の変わり目の衣替えもあまりこだわらず、その日の気候や体調に合わせて選んでいる。

c. 周囲の反応

着物で買い物に出かけると、普段入れないおしゃれで高級なお店にも入りやすい。高価な着物を着ていなくても、着ていると安心し本来の自分でいられるため、店員の対応などもよいように思う。

d. 着物の魅力

状況に合わせて帯や小物の組み合わせを変えるだけで何通りもの着こなしができる。洋服ではありえない色や柄の着物は、見ただけでは似合わないと思ってしまうが、帯合わせなどで自分なりに着こなせば好みのコーディネイトにもなるところが不思議なおもしろい。

「和」が好き、着物の色・柄が好き、経済的など着物

が好き理由はたくさんあるが、その中の一つにいろいろな自分になれるというものがある。自分でテーマを決め、それらしいコーディネートをするのは、自己満足だがとても面白い。洋服でやろうとすると毎回イメージを変化させるためには相当なアイテム数が必要になるが、着物は基本的に使いまわせるので、同じ着物でも他のものの組み合わせ次第で別人のコーディネートになるところが魅力的である。

インターネット上などで着物を通じて友人ができ、一緒に着物で外出することも楽しい。

e. 現代の着物のあり方に関して

街で着物を着ている人を見かけることが多くなったが、自分とは違いよそ行きの人が多い。

2.3 インタビュー

① Aさん

44歳、会社役員、大阪府在住

a. 着物を着ようになったきっかけ

1960年代後半のアパレル産業の発展時期に青年期を過ごし、その中で流行が繰り返され1～2年で着られなくなるという消耗品である洋服に嫌気がし、信じる対象でなくなったという思いが始まり。しかしそこからすぐに着物生活につながるわけではなく、多くの要因が重なっている。

成人式でひどい着付けをされたこともあり、着物に対してはネガティブなイメージを持っていた。その後、大ファンであるデヴィッド・ボウイが来日したときに、成人式の際に着用した着物でコンサートに行った経験がある。着付けも以前の時ほど辛いものでなく、着物に対するネガティブなイメージが少し緩和される。それ以降も洋服を選ぶのと同様に、かわいいと思うような着物にめぐり合うことはなかったが、20代半ばの時に姉のために見立てられた大量の着物が姉よりもAさんに似合うものであったため、自分用に仕立ててもらった。また結婚後、義母の形見の着物が出てくるなど、自分の着物を所持するようになる。30代半ばになり、結婚式などに出かけるときには昔の洋服はもう着られないと思い、よそ行きに関しては着物を着ようと思い始める。

b. 実践について

30代半ばで、着付けを学んだ友人に4回レッスンをしてもらった。それ以外は実際に着ることで身につけた。実際に着物を着用して街に出ることで、着物を着ることが特別で目立つことだという意識を取り払い、出歩ける根性をつけた。

普段は主に古着屋で購入している。そごう貸衣装処分市に行ったことで古着の存在を知る。ヤフーオークションで知り合った古着屋さんがきっかけで古着を購入し着るようになった。今まで呉服店で購入していたものより、安く自分の好みのものが購入できる。

安く古着を手に入れられるようになり、とりあえず

買っては着るという時期が4、5年続く。洗い張り、寸法直しなど知識も経験もなかったが必要に迫られ和裁教室に通う。近所には洗い張り屋さんが数軒あったため、ここに持っていけばいいのだという意識は以前よりあった。自分でメンテナンスをするようになり、着物の構造が理解できるようになると、呉服店の言いなりではなく知識を持って見られるようになった。また、着慣れて身のこなしが身につけてくると着物を汚さなくなるしメンテナンスも楽になる。余所行きしか着ていない人にとってはメンテナンスの苦労は敬遠される理由のひとつである。

c. 周囲の反応

20代半ば、美容院で変わり結びにしてもらった帯を見知らぬおばさんに直されたことがある。それ以降しばらくは「お直しおばさん」(林1992, 89-91)に会いたくなくて、着物を着るとびくびくしてしまう時期があった。「お直しおばさん」とは着付け学校で習った着付けが、いかに大変かということを見せつけたい、助けることで自分の価値を再確認したいと思っている人だと考えている。洋服の場合はこっそり注意したり、注意してもいいか迷ってしまうものだが、着物の場合は公然と多くの人の前で声を大にすることが多い。

d. 着物の魅力

着物は料理や俳句に似ていて様々な要素を組み合わせるところに面白さがある。粋の中で季語を入れるところも着物と同じで、そのパーツ自体20年、30年たっても使える。そういった独特のルールの中で、自分なりの物語を作り視覚化できるところが着物の魅力であり、洋服ではできないところである。

呉服屋は売り手が売りたいものを店に並べているが、古着屋はたくさんある中から自分で探すため、気に入ったものが見つければ喜びにつながる。これほど古いものが見違えるように綺麗になり、まだ着られるという古着独特の魅力も感じている。

e. 現代の着物のあり方に関して

着物を着ていると何か習い事をしているかと聞かれることが非常に多いが、着物を着ることで日本文化に触れなければならないわけではないと考えている。着物に合わせて自分の立ち位置を変えていたのでは、着物生活は続かないので、着物自身を自分のスタイルに取り込むことで着物生活を楽しんでいる。

呉服業界のキャッチコピーなどでも耳にする「着物は日本の心」ということに関しては否定的で、現在では誰も着ていない衣装が日本の心とは言えないと考えている。戦争によって着物文化が壊された背景を考えると着物=日本の心とはならない。着物は永遠普遍のものと思われており、Aさんも以前はそう思っていたが、実際は洋服の流行と同様、柄や着付け方において変化していないところなどない。

② Bさん

44歳，自営業，大阪市在住

a. 着物を着ようになったきっかけ

結婚以前は母親に着せてもらう機会が多く，着付けにおいてあまり苦しい思いをすることがなかったため着物を着ることが好きだった。母親は和裁を習っていたため振袖なども縫ってもらっていた。嫁入り道具として数着，着物を用意してもらすが，それを自分で着られないことをもったいないと感じ，着付け教室に通うようになる。

b. 実践について

20代半ばで着付け教室に3年間通い，現在は知人の間で着付け教室を開き教えている。着物を着始めた頃は習った通りのきっちりとした着こなしであったが，年をとるほど楽な着方になってきた。着付け教室を卒業して以来，外出用のおしゃれ着としてはほとんど洋服は買わず着物を着用しているが，祖母のものが出てきたり知人から譲り受けるといった機会が多いため着物もそれほど購入はしていない。洋服ほどサイズや好みもはっきりしないので，もらったものでも問題なく使用できる。

着物での外出は食事，文楽，美術館などが多いが気を張ることはなく，洋服で言えばジーパンにTシャツ程度の着物で出かけることの方が多い。カジュアルな着こなしでも着物というだけでおしゃれに見られるようである。

c. 周囲の反応

京都など，着物を着ている人が多い場では少し周囲の目が気になるが，着付けを直されたり注意されるよりも褒められることの方が多い。特に夏は涼しげな印象を与えるようである。それほど意識してはいないが，着物を着るからには綺麗でいたい。一度だけ，見ず知らずの人に着付けを直されたことがある。何も声をかけずに急に近づいてきて直していった。こういう人は自信のある人で，個性で崩している場合もあるので自分はなかなか他人の着付けは直せない。

d. 着物の魅力

年齢的にも，洋服を着ていてその着こなしを褒められるということはまずないが，着物では褒められる機会が多い。季節によって素材や柄をかえて着るというルールはむしろかしいところでもあり，いかにも日本らしいもので，その縛りがなくなってしまうと面白みがなくなってしまう。決まりごとの中で工夫するところに楽しさがある。お茶を習ったり文楽に興じたりと，日本文化に触れるには着物を着用している方が入り込める。また洋服よりは工夫次第で長持ちするために着物を譲り受けることも多いが，思い出や心がこもったものを引き継ぐという意味でも大切にしたいと思える。改めて，なぜ着物を着るかということを考えても「あるから」という感じである。ないと淋しく，とても身近な存在になっている。

③ Cさん

70歳，自営業，大阪市在住

a. 着物を着ようになったきっかけ

両親，祖父母ともほとんど着物着用の生活の中で育ち，小学校2，3年の頃，踊りを習い始めたこともあり，子どもの頃から着物に触れる機会が多かった。大学生になり，着物が好きという気持ちから正月などには自分で着物を着ていた。その頃の着物は和裁のできる祖母が，母や祖母の着物を自分用に縫い直してくれたものだった。

中学の同窓会に着物で出かけた時，知人に洋服より似合うと褒められたこともあり，洋服よりは着物の方が自分に合っていると感じる。家にたくさん着物があるのだから着ないのは損だと，着物を着るようになった。

b. 実践について

着付け教室などはなかったため，家で何度も着せてもらっている内に体で覚えた。見ていたままを実践していたらいつの間にか身についた。帯は一人で結べなかったが，結婚してから近所の人に教わり練習した。形どおりの着付けよりも，しわも個性の一つ，と自分の体に合わせた着付けが一番だと考えている。

日常的に着物を着るようになって以来，人から着こなしを注意された経験はないが，自分なりに失敗だと感じることがあり，着物を着る時は気を張っていた。洋服のように同系色でまとめた着こなしが多かったが，段々着物特有のコーディネートがわかるようになった。それからは周囲の目も気にならず，さりげなく着物を着るようにしている。時間を経るごとに，着物でいることが自然になり，着物を着なくてとは感じていた頃から，着物を自然に着るようになると変化していった。

20年近く下着類以外の洋服は購入しておらず，どんなところでも出かけるときは着物を着ている。着物を着ることはそれほど特別なことではない。

d. 着物の魅力

着物を着ていて見ず知らずの人に褒められるということは洋服では味わえないことである。また洋服と違い何でもありにしまわずに季節に合わせたものを選んだり，所作を身につけたりすることも大切であり，また楽しいことである。日本人として着物を着るチャンスがあるなら着たいと感じている。着物を着るなら茶道や華道といった日本のものを習うのもいいことである。

e. 現代の着物のあり方に関して

今の人みんな着物を着るということを硬く考えすぎている。呉服業界においても日常的に着物を着る楽しさを伝える前に，高額な着物を売ることが先行してしまい着物においてのハレとケの区別がなくなってしまう。着付けも，日ごろ着物を着ないような人が着付けると，型にはまった苦しい着付けになってしまう。着物の着付けや着こなしのルールをきちんと守った中で自分の身のこなしにあった着物の着用方法を理解すれば，洋服を楽しむ気持ちと同様に着物を楽しむことができる。

④ Dさん

55歳，主婦，奈良県在住

a. 着物を着ようになったきっかけ

大学時代は、世間的にも珍しいことではなく、お茶を習っていたこともあり週に一度ほど着物を着ていた。結婚後も暖かいなどの理由から着物を着ていたが、子どもの入学式、卒業式を境にメンテナンスの面倒さから着物から離れることになる。その7、8年後、呉服屋さんと知り合いになり、自分の持っていた着物を染め替えてもらう。その仕上がりが美しく、自分の持っていたものがこれほどまでになるのなら着てみようと思う。その後、近所の友人たちが実は着物を着ていることが判明し、再び着物を着るようになる。

b. 実践について

現在は月に3、4回着用している。大学時代の着物があるため購入するよりも、持っているものを少しずつ染め替えるようにしている。当時着ていた着物は綿の着物や既製品といった普段着用のものが多い。

着付けは初めからむずかしいと感じることはなく、何となく巻きつけるように着ている内に自分で着られるようになった。帯は手伝ってもらったり、付け帯を使用したり、着付けにそれほどこだわりはなかった。着物を再開したときにきちんとした方法を身につけようと着付け教室に3ヶ月通う。以前よりもコツがつかめたために、着物を着ることが一層楽になり着用頻度も高くなった。動きにくいと感じることもなく、洋服でできることは大体着物でもやってのける。洋服でもスーツやパンストは窮屈で暑いし、ピンヒールの靴は足が痛くて履けない。

若い頃から着物に慣れていたため失敗経験などはほとんどない。着物のルールについて他人から尋ねられることも多い。またフォーマルな場での着用以外は、自分が楽しめる程度にルールを守っていればよい。また、どうしてもわからない場合は呉服屋さん聞くようにしている。

c. 周囲の反応

街で写真をとられることが多いが、何とも言えない快感である。何千万円もするような毛皮のコートを着ていてもそんなことはないだろうが、普段着の着物を着ているだけで褒められることが多い。

家族、特に男性はあまり嫌な感情は抱いていないようである。人と違うファッションをしているという点では喜んでおり、自分も褒めてもらえることは嬉しい。しかし、戦後に成人期を過ごした母にとっては洋服の方が先進的で、着物は古く値打ちがないものという認識であり、着物を好んで着ている姿を見て呆れている。

d. 着物の魅力

洋服を着ているときよりも気分がしゃっきりとする。また洋服より色や柄が豊富で美しく、組み合わせも多く世界が広がる。とても日本的なものであるが、普遍のものではなく現在は違う形でなぞっているようなもの。

長く慣れ親しんだ身近なものであるため、改めて着物の魅力について考えたことはない。

e. 現代の着物のあり方に関して

着物もファッションの一部であり、若者によく見られる短く着付けた浴衣は似合っていれば問題ないと思う。何でもいいから着てみて、好きになるということはよいことである。若者は「着物がしんどい」という気持ちよりも「しんどくてもおしゃれなほうがいい」と感じているように思う。

着物は何代も着回しが利いて、破れたり汚れたりしても仕立て直せばよみがえる、とてもエコロジーなもの、という認識は確かに間違っていないが、そのためには優れた技術者と知恵が必要である。着物の着回しを支える文化がないと成り立たない。昔は各家庭にその技術があり着物生活を支えていたが、現代で着物を着るならば呉服屋さんの存在なしでは成り立たない。そういった現実を知らないでイメージが先行しているところもあるが、和装業界などのバックアップがないと知識をつけられないのが現状である。

⑤ Eさん

52歳、主婦、奈良県在住

a. 着物を着るようになったきっかけ

石川県、金沢の出身で古典芸能が盛んなところだったため日本舞踊やお茶を通して着物にも触れる機会は多かったが、自分に向いていないと感じ長続きしなかった。着物も含め日本文化に見られる独特のしきたりやルールは非合理的だと感じ否定してきた部分があった。その約7年後、お寺の住職から聞いた「民族衣装を着られない人間は日本人だけ」という話が印象に残る。また子どもの入学式や卒業式のための洋服が今ひとつ似合わなくなってきたので、それならば着物のほうがしゃれっぽいと思い、フォーマルな場では着物を着用するようになる。更に着物を着ている友人と京都に出かける機会に自分も着物を着るなど、着物着用の機会が増えるが、そのつど美容院で着付けてもらうと値段も高く自分で着られればよいなという気持ちが湧いてくる。

b. 実践について

月一回ほど着物で外出している。着物で外出する一週間前には着物に帯を乗せてコーディネートすることを楽しんでいる。娘はお茶を習っていて、着物を着ることも苦痛ではないようなので、一緒に着物を着る機会もある。いずれ娘に着物をあげられるという気持ちで自分も心置きなく着物を着ることができる。

着物を着るようになってすぐの頃はルールを知らなくて友人や呉服屋にアドバイスを受けることもあった。知識がなかったためその時は問題なかったが、後から間違いを知ったときにとっても恥ずかしい思いをした。ルールありきの着物だと考えているので苦にはならず、少しずつ勉強しながら覚えていった。着物が何枚かそろってくるとコーディネート幅も広がり、自分の好みに着こなせるようになり楽しい。

無料の着付け教室に通い、慣れることが大切だと思い少し着られるようになると、多少着崩れていても出かけ

るようにした。着物仲間に着付けを直してもらったり、コーディネイトの相談をしたりできるため心強い。

c. 周囲の反応

街で写真を撮られたり、視線を感じたり、注目を浴びることが多い。レストランでよい席に通してもらえたり、高級ブティックで対応がよかったり、普段洋服を着ている時よりステータスが上がるようである。逆に着物を着ている人を見かけた時も、素敵だな、とつい見してしまう。

d. 着物の魅力

とても高価だが染め替えたり八掛をかえれば違う雰囲気になり、それでも着られなくなれば娘にあげられるなど、着物は長く楽しめる。今でも20代の頃の洋服を少し着るが、時代遅れに感じる。着物には形や柄の流行はなく、古い着物には古いよさがある。

身につけるものが長着、帯、足袋などと決められており、そういうものの中でどれだけ組み合わせで遊べるかということが面白い。制限の中でいろんなことができるというスタイルには先人の知恵が詰まっている。

e. 現代の着物のあり方に関して

通っていた着付け教室と一緒に卒業した10人の内、その後も着物を着ているという人は自分と友人の二人だけである。着物に興味を持っている若い人も多いが、周りにその素養がある人がいないため、着ることができないようである。

3. 考 察

結果の概要を表1にまとめた。またそのなかから、「着用機会」「母・祖母等のサポート」「購入場所」「着付けの習得」「メンテナンス方法」「和裁の習得」「日本文化」とのかかわりについて、それぞれのケースの状況を表2に表した。表2の「着用機会」は着物を在宅時に着用しているか、外出時に着用しているかを示したが、全13例のうち、外出時が10例、外出時と在宅時の双方に着用しているケースが3例で、在宅時のみのケースは見られなかった。「母・祖母等のサポート」については、成人までに家庭で着物に触れる機会があったり、現在でも母や祖母から譲り受けた着物を所持していたり、着付けのアドバイスを受けていたりしている場合に「あり」とし、それがない場合には「なし」とした。10例が「あり」で、1例が「なし」、2例が不明であった。購入場所については、呉服店7、古着店4、骨董市2、ネットオークション1、リサイクルショップ1であった(複数記入)。古着店以下は、40代より下の、若い着用者に集中的に見られた。「着付けの習得」は、着付け教室が8例、幼少時より自然に身につけたという人が2例、母・祖母から習ったという人が2例、知人友人からが2例、独学が1例であった(複数記入)。洗濯・仕立て直しなどの「メンテナンス」については、呉服店が5例、近所の洗い張りなどに頼んでいる人が2例、自分でおこなっている人

が2例、不明が4例であった。メンテナンスと関連する「和裁の習得」については4例が「あり」で他は不明であった。最後に、古典的または伝統的な、いわゆる「日本文化」とされているものとのかかわりは、「お茶」(茶道)が6例、日本舞踊(日舞)が4例、歌舞伎が1例、古典文学が1例、文楽が1例であった。

以上の結果を、これまでの生活環境、現在の社会状況、現在の生活環境、の3点に分けて考察する。

3.1 これまでの生活環境

日常的着物着用者の多くにとって、そのきっかけとなっているのは成人までの家庭環境である。幼少の頃着物を着せてもらった経験や着物を着る習い事、家族が着物を着ていた・所持していたなどということが、着物を着るようになるということに大きく関わっていると考えられる。全体の13例の内、10の事例で「子どもの頃に着物を着ていた・見ていた」、「親が持っていた」などといった家庭環境が背景にある(表2の「母・祖母等のサポート」の項参照)。

またその後、「洋服が(体型の問題で)着られなくなった、似合わなくなった」という実質的な原因もある。「洋服の流行を追うのに疲れた」との発言も複数のケースで見られた。これはある程度の年齢に達した時に感じるもので、20代～30代の着物着用者には見られなかった。年配の着物着用者は多少なりとも必要に迫られて着物を選択したようにも考えられる。一方、20代の頃に、着物に一たん興味を示し着用するようになったが、その1～2年後に「着物熱が冷める」状態が見られた。

3.2 現在の社会状況

①古着ブーム

今回の事例では古着との出会いがきっかけになっているものが多い。「平成19年きもの市場調査」(全日本きもの振興会2007)からもわかるように、近年着物のインターネット販売やリサイクルが増加している。洋服でも古着ファッションが確立しているように、着物でも古着・アンティークファッションがひとつのブームとして好まれ着用される傾向にあり(北村2004)、このブームにより簡単に安く着物を購入できるようになった。以前より着物に興味を持っていたが、高額で敷居が高い着物の世界になかなか踏み切れずにいた人たちも、着物の購入が可能になり着用生活に踏み切ったと考えられる。

②インターネット

上記の古着ブームの背景には、インターネットの普及がある(北村2004)。日常的着物着用者の多くは、ネット販売で着物を購入したり、オークションで売買したり、自分でブログを作成したり、他人のブログから情報を得たりしている。1990年代が中心の「著書」による調査では見られなかったが、ブログ、インタビューによる調査対象者のいずれもが、インターネットを積極的に活用

表1 調査結果の概要1

	プロフィール	aきっかけ	b実践	c周囲の反応	d着物の魅力	e現代の着物のありかた
著書	通崎陸美 35歳、マリンバ奏者、京都市在住	父親が京都の女の子らしく育てたいという思いを持っており、着物を着る機会も多かった。20代半ば、おばの形見の着物に出会い、着たいと思ったことから着物を集めていく。	幼馴染と近所の女性の元で着付けを習う。着始めた頃は周りの意見や着物のルールにとまどったが、「気持ちのいい格好」で出かける決めてからは楽しく着られるようになる。古着屋を中身に購入し、自分流のコーディネートで着物を着こなす。近所のおばちゃんが寸法直しから洗い張り、仕立てまで面倒を見てくれるので古着生活が成り立っている。	洋服をわざと着くずした時に、だらしがないと注意を受けても気にならずに留めなが、着物は年長者にネガティブコメントをされるとキックとする。	「名もないところ」が魅力の古着ではあるが、自分の所持している帯が、実は構成主義の芸術家によって描かれたものであったとわかった時に興奮して調べてみる。	
	永田萌 43歳、イラストレーター、京都市在住	自分の絵を使った着物の仕事もしていたが、着物は「贅沢な人のもの」と決め付けていた。しかし知人について行った呉服の展示会で着物をローンで購入してしまい、京都という土地柄にも後押しされ、着物を着るようになった。	着付けを習うが、自分だけの着心地のいい着方というものを、着て慣れることによって身につけた。親しくなった呉服屋に自分でデザインしたモチーフを刺繍してもらったり、好きな色に染めてもらったりと、呉服屋との付き合いが着物生活を楽しむ鍵となっている。洋服は脱ぎっぱなしということも多いが、着物の着用後は必ず手入れを欠かさない。着物で旅行をしようと思いが失敗を重ね、初心者は着物で無理なことをしてはいけないという教訓を得る結果となった。	呉服問屋の並ぶ古い街に住んでいるため、着物を着た日は周囲の視線が気になり、出歩くことすら苦勞した。しかし着物に慣れ、楽しむことができるようになって自分ひとり目立つわけがない、逆に京都ならごく普通に着物を着て楽しむことができる。	公の場に出るときは洋服よりも着物のほうが評判がよく、黙っている限りおしとやかに見られる。季節の柄の着物は着られる期間も短く贅沢だが、季節が巡るたび「もうすぐあの着物が着られる」という楽しみがある。仕立てるときやコーディネートする時に自分の中で物語を作ることができる。	
	大橋歩 54歳、イラストレーター、東京都在住	戦後に幼少期を過ごし、洋服は更生服、たまに着せてもらう着物も大人の着物の仕立て直しばかりであった。それでも着るものが大好きだった。イラストレーターという職業上、プラスになると思い流行を追っていたが、段々と洋服が豊かになり困惑し疲れが出る。その頃から着物を着るようになる。	子どもの頃に着ていた経験があり、自主的に着たいと思った時に困ったことはなかった。友人に呉服屋に連れて行ってもらう選ぶ楽しみを知るが、見た目も悪く金持ちでもなかったためその店からはあまり歓迎されなかった。何とか買える着物を数年かけて手に入れていき、購入した着物を着てその呉服屋を訪れることで自分というものを理解してもらった。それ以来、呉服屋も少し親切になり、好みの着物を出してもらえるようになった。	着物についてあまり知らないときは、おもしろいコーディネートでじろじろ見られることも多い。しかし、着物に詳しくなっていくうちにコーディネートができてなくなり、つまらないと感じることもある。	仕事、家事のやりやすさを考えれば洋服より優れているものというわけではないが、着る楽しみがある。長年かかってきた文化であるため、日本人として楽しみたい。手と顔しか見えないため一番自分らしさが出る衣服である。	現在成人式で見られる振袖はベラベラの生地が多いが、体のラインが強調され逆効果である。また洋服デザイナーの名前を貸しただけのもの、濁った色の振袖は若い人に着物というものを歪んで受け取らせてしまっている。
	林真理子 38歳、小説家、東京都在住	20代の頃は成人式の着物以来ほとんど着用機会のないまま過ごす。30代、西陣の帯屋の若旦那と知り合いになり、着物に興味を持つ。友人と見に行った呉服屋が、自分の好みのものが多く気に入ったことから、この呉服屋との付き合いが始まり着物生活を送ることとなる。	展示会は着物を売りつけられたり、ついローンを組んでしまったという話を聞くが、まず行ってみてたくさんの着物を見ることが大切。呉服店でも同様、着物についていろいろなことを聞いてみる。帯び合わせは最も難しいことで、教えられるほどの失敗を繰り返した。しかし、ルールとは数年で変わってしまうものなので、とらわれず着て楽しむ。着物を着るために、お茶、日舞を習い内面から自分を変えていった。	着物姿であればレストラン、ブティックなれどどこでも歓迎される。着物人が多く集まる場にはあえて着物で行く。お互い着付けや着こなしにチェックが行くが、その緊張感では着物特有のものである。着物姿は一種のパフォーマンスで公共性を帯びる注目を浴びる。	着物の醍醐味は着終えた時と着る前に思案する時。洋服より思案が多い分着物のほうが奥深い。着物は教養なのが、頭やセンスがなかったら着こなせない。若い女の子と洋服で勝負しても勝てないが、着物は着こなし次第で、20歳の女の子より70歳のおばあさんのほうが美しいということもありえる。	今の若い人は着物=高いというイメージしか持っていないが、着たかと思ったら着こなさないと考えている人もたくさんいる。業界の閉鎖的なイメージを払拭し、若い人の着たいという気持ちを汲み取らなければ着物の存続は危ぶまれる。

<p>きもの暮らしの城</p>	<p>40～50代、インターネット関係、熊本県在住</p>	<p>幼少の頃から着物を着せてもらうことの多い生活であった。母、祖母も着物を着ており、お茶、踊り、和裁なども習っていた。洋服で人から褒められることはなかったが、成人式で着物を着た時、初めてたくさんの人から賞賛を得た。「365日24時間着物で生活」するに至ったのは、袴を手に入れたことバイクに乗れるようになったから。</p>	<p>1日に着る着物は3枚、自宅用の生活着、出勤用の外出着、仕事用の仕事着。これにフォーマルな着物が加わる。ポリエステルや木綿の着物が多い。着付けは習っていないが母が厳しくチェック。着物や帯はお金をかけて手に入れるものだが、着付けや立ち居振る舞いは自分で身につけられるもので、それだけで着物をよりよく見せることができる。生活着とおしゃれ着で着方が変わることは洋服も同じ。和裁を習得しているため、端切れで裏をつけたり、浴衣でもんべを作ったり、デニム地で着物を作ったりしている。</p>	<p>24時間着物生活に移行したとき夫は何の抵抗もなかった。マンション暮らしのため、着付けに広いスペースをとることがだけが不満なようである。近隣の住民は着物で生活していることを知っているため、周囲の目が気になることはない。普段着らしいコーディネートにすれば生活の中で違和感を持たれない。</p>	<p>現在の着物事情では留袖、訪問着が多く流通しているが、生活のワードローブとしてそれほど着用機会がないものは必要がない。着ている時間が長い衣服ほど必要枚数も多くなる。</p>
<p>アンティークキモノ生活のススメ</p>	<p>20代、美容師、愛知県在住</p>	<p>和裁士、美容師、着付けの師範免許を取得。着物が好きで着物関係の仕事がしたいという思いと、ものづくりが好き、教えることが好きという思いから、美容院の仕事で着付けを教え、個人の着付け教室も開く。近所のアンティークショップとの出会いが着物生活に大きく関わる。</p>	<p>和裁専門学校で学んだことを活かし、自ら半襟、足袋、着物を製作。着用の際はほとんど外出時。着物の知識は一通り習得しているために着こなしで苦労するということはないが、自分なりの着こなしで自由に楽しんでいる。もともと家に自分のために読んでもらった着物や母の着物があったが、現在はほとんどアンティークショップや骨董市で購入。古着は傷みが多いがあまり気にせず、自分でできる範囲で修復して着用。</p>	<p>大正ロマン風の派手な着物を着ることが多いため、じろじろ見られることもある。どのよくな気持ちは見られているのかわからないので複雑な気分になる。仕事面では着物のほうが第一印象がいいように信用されていると感じる。</p>	<p>着物を着たいという気持ちは女性特有の変身願望からきているもので、洋服とは違ったコーディネートを楽しんでいる。半襟、帯締め、帯揚げなど小さな面積の配色で全体の印象を大きく左右するところがあり、おもしろく奥深い。</p>
<p>プログ 着物でトコトコ</p>	<p>26歳、百貨店勤務、東京都在住</p>	<p>素敵な大人の女性になりたいと思い、そのイメージが「日本の伝統を身につけた人」だった。お茶を習っていたため着物を着る機会があったが、23歳を機に着物を着ようとして決心。リサイクルショップで安い着物に出会い、購入した一枚から着てみたいコーディネートが広がり、それ以後着物を集め着用するようになった。</p>	<p>着付けは独学。お茶の稽古、食事や買い物、着物仲間との外出など、月に2～3回着用。呉服屋は敷居が高く入れないが、ショッピングセンターやチェーン店は気軽に入って見ることができる。購入はほとんどリサイクルショップ。母の嫁入り道具や祖母、曾祖母の着物も所持。わからないことはお茶の先生やブログ上で質問。自由な着こなしも面白いと思うが、自分はきちんとした着こなしでまわりを大切にしている。</p>	<p>着物で外出しても周囲の視線はそれほど気にならない。街でも着物姿の若い女性を見かける機会も多い。着慣れないために着崩れている人に眉をひそめる人もいるが、まずは着てみて、失敗してもそこから学べばいいと思う。</p>	<p>洋服より断然動きにくく、動きに気をつけなければならない。街でも着物倒だが、そうすることによって所作が美しくなる。古典文学やお茶など日本的なものへの憧れが強く、特に着物はその一つとしてぜひ身につけたいと考えている。</p>
<p>桃葉の着物日和</p>	<p>30代、主婦、大阪府在住</p>	<p>外出時はほとんど着物。着物で海外旅行の経験もある。アンティークの着物が好きだが身長が高いため自分では着られない。帯が好きなのでアンティークものでも帯を中心に購入している。自分の手持ちのものに合わせて選ぶのではなく、気に入ったものを購入する。メンテナンスは夏物の洗濯や染み抜きなど、できるものは自分でしている。なるべく着物を着ている時間を増やすことで、所作や立ち居振る舞いを身につけるようにしている。着付けは以前に習い、今では友人に教えている。着付けを習い始めた頃はルールをいつも先生に質問していたが、今はほとんど普段着の着物しか着ないので、遊びのある着こなしで問題ない。衣替えもあまりこだわらず、その日の気候や体調に合わせて選ぶ。</p>	<p>着物で買い物に出かけると、普段入れないお菓子も入るや高価なお店にも入りやすい。高価な着物を着ていなくても、着ていると安心して本来の自分でいられるため店員の対応などもよいように思う。</p>	<p>帯や小物の組み合わせで何通りもの着こなしができる。洋服ではありえない色や柄も組み合わせなどで自分なりのコーディネートにもなる。「和」が好き、色・柄が好き、経済的など着物が好きな理由はたくさんあるが、その中の一つにいろいろ自分になれるということがある。洋服で毎回イメージを変化させるためには相当なアイテム数が必要だが、着物は同じ着物でも組み合わせ次第で別人のコーディネートになるところが魅力。着物を通じて友人ができ、一緒に着物で外出することも楽しい。</p>	

Dさん	55歳、主婦、奈良県在住	<p>大学時代は世間的にも珍しいことではなく、お茶を習っていたこともあり週に一度ほど着物を着ていた。結婚後にも暖かいなどの理由から着ていたが、子どもの入学式、卒業式を境にメンテナンスの面倒さから着物から離れる。その7、8年後、呉服屋さん知り合いになり、自分の持っていた着物を染め替えてもらう。その仕上がりが美しく、これほどまでになるのなら着てみようと思う。その後、近所の友人たちが着物を着ていることが判明し、再び着物を着るようになる。</p>	<p>現在は月に3、4回着用。大学時代の着物があるため持っているものを少しずつ染め替えるようにしている。当時の着物は普段着用しているものが多い。着付けは、何となく巻きつけるように着ている内に自分で着られるようになった。帯は手伝ってもらったり、付け帯を使用したりした。着物を再開したときに着付け教室に3ヶ月通う。以前よりもコツがつかめ着用頻度も高くなった。洋服でできることは大体着物でもやってみよう。若い頃か慣れていたため失敗経験はほとんどない。ルールについて他人から尋ねられることも多いがフォーマルな場での着用以外は、自分が楽しめる程度にルールを守っていればよい。どうしてもわからない場合は呉服屋さんに行く。</p>	<p>街で写真を撮られることが多いが、何とも言えない快感である。何万円もするような毛皮のコートを着ていてもそんなことはないだろうが、普段着の着物を着ているだけで褒められることが多い。家族、特に男性はあまり嫌な感情を抱いていないようである。しかし、戦後に成人期を過ごした母にとっては洋服の方が先進的で、着物は古く値打ちがないものという認識であり、着物を好んで着ている姿を見て呆れている。</p>	<p>洋服を着ているときよりも気分がしゃっきりとする。また洋服より色や柄が豊富で美しく、組み合わせも多く世界が広がる。とても日本的なものであるが、普遍的なものではなく現れは違う形でもなぞっているようなもの。長く慣れ親しんだ身近なものであるため、改めて着物の魅力について考えたことはない。</p>	<p>着物もファッションの一部であり、若者に見られる短く着付けた浴衣は似合っていれば問題ない。若者は「しんどくてもおしゃれなほうがいい」と感じているように思う。着物は着回しが利いて、仕立直せばよみがえるエゴロジ的なもの、という認識は間違っていないが、そのためには優れた技術者と知恵が必要である。着物の着回しを支える文化がないと成り立たない。そういった現実を知らないイメージが先行しているところもあるが、和装業界などのバックアップがないのが現状。</p>
Eさん	52歳、主婦、奈良県在住	<p>金沢の出身で古典芸能が盛んだったため日本舞踊やお茶に触れる機会は多かったが、自分に向いていないと感じ長続きしなかった。日本文化独特のしきたりやルールは非合理だと否定してきたが「民族衣装を着られない人間は日本人だけ」という話が印象に残る。子どもの入学式や卒業式のための洋服が似合わなくなってきた着物のほうがしゃっばいと思いい、フォーマルな場では着物を着用するようになる。着物を着ている友人と京都に出かけるなど、着物着用の機会が増え、自分で着られればいいと思うようになる。</p>	<p>月一回ほど着物で外出。一週間前には着物に帯を乗せてコーディネートすることを楽しむ。娘はお茶を習っていて一緒に着物を着る機会もある。いずれ心置きなく着物を着ることができる。最初の頃はルールを知らなくて友人や呉服屋にアドバイスを受けた。後から間違いを知ったときにとっても恥ずかしい思いをした。ルールありきの着物だと考えているので苦にはならず、少しずつ勉強しながら覚えていった。着物がそろってくると幅も広がり、自分の好みに着こなせるようになり楽しい。無料の着付け教室に通い、多少着崩れても出かけるようにした。着物仲間に着付けを直してもらったりコーディネート相談をしたりできるため心強い。</p>	<p>街で写真を撮られたり、視線を感じたり、注目を浴びることが多い。レストランでよい席に通してもらえたり、高級ブティックで対応が良かったり、洋服を着ている時よりステータスが上がるようである。逆に着物を着ている人を見かけた時、素敵だな、とつい見してしまう。</p>	<p>とても高価だが染め替えたり八掛をかえれば違う雰囲気になり、それでも着られなくなるなど、着物は長く楽しめる。今でも20代の頃の洋服を少し着るが、時代遅れに感じる。古い着物には古いよさがある。どれだけ組み合わせで遊べるかということが面白い。制限の中でいろんなことができるというスタイルには先人の知恵が詰まっている。</p>	<p>着物に興味を持っている若い人も多いが、周りにその素養がある人がいないため、着ることができないようである。</p>

空欄は不明

表2 調査結果の概要2

調査方法	名称	プロフィール	着用機会	母・祖母等のサポート	購入場所	着付けの習得	メンテナンス	和裁の習得	「日本文化」とのかかわり
著書	通崎陸美	35歳、マリンバ奏者、京都市在住	在宅時 外出時	あり	古着店、骨董市	着付け教室	近所の おばちゃん		
	永田萌	43歳、イラストレーター、京都市在住	外出時		呉服店	着付け教室	呉服店		
	大橋歩	54歳、イラストレーター、東京都在住	外出時	あり	呉服店	子どもの頃に自然に	呉服店		お茶、歌舞伎
	林真理子	38歳、小説家、東京都在住	外出時	なし	呉服店	着付け教室	呉服店		お茶、日舞
ブログ	きもの暮らしの城	40～50代、インターネット関係、熊本県在住	在宅時 外出時	あり		母		あり	お茶、日舞
	アンティークキモノ生活のススメ	20代、美容師、愛知県在住	外出時	あり	古着店、骨董市	着付け教室	自身	あり	
	着物でトコトコ	26歳、百貨店勤務、東京都在住	外出時	あり	リサイクルショップ	独学			お茶、古典文学
	桃葉の着物日和	30代、主婦、大阪府在住	在宅時 外出時		呉服店、古着店	着付け教室	自身	あり	
インタビュー	Aさん	44歳、会社役員、大阪府在住	外出時	あり	古着店、ネットオークション	友人	近所の洗い張り屋さん	あり	
	Bさん	44歳、自営業、大阪市在住	外出時	あり	(譲り受けることが多い)	着付け教室			お茶、文楽
	Cさん	70歳、自営業、大阪市在住	外出時	あり	呉服店	母・祖母・近所の人			日舞
	Dさん	55歳、主婦、奈良県在住	外出時	あり	呉服店	自然に・着付け教室	呉服店		お茶
	Eさん	52歳、主婦、奈良県在住	外出時	あり	呉服店	着付け教室	呉服店		お茶、日舞

空欄は不明

して日常的着物着用に役立てていた。逆に、インターネットがなければ、ここまで日常的に着物を着用することはなかったのではないかと考えられる着用者も見られる。

③希少価値と文化的価値

洋服を着ているときに見ず知らずの人に褒められるということはあまりない。ましてや年齢が高くなるにつれそういった経験はできなくなる。しかし着物では年齢に関係なく、また着用している着物の新旧も関係なく褒められることがある。これには、現代社会において、日常的着物着用者が少ないということと、着物に文化的価値が認められているという、二つの社会的状況が背景にある(森 2002)。着用者の側は、褒められたいがために着物を着ているわけではないが、せっかとおしゃれをしたのだから、たくさんの人に見てもらって褒めてもらいたいという願望はあるようだ。

3.3 現在の生活環境

①着物のルールと組み合わせの楽しみ

エッセイで多く見られた失敗談が、ブログやインタビューの事例ではあまり見られなかった。これはエッセイの事例では職業柄、着物で公の場に立ったり多くの人の目に触れたりすることが多いため、着こなしもよりフォーマルなものとなりルールも当然厳しくなる。しかしブログ、インタビューの事例では自分が楽しむ範囲でのカジュアル着としての着用であるため失敗と感ずることが少ないようである。また着物の経験が多くなるにつれ着付けや着物のルールに煩わされることもなくなってくるため、洋服を楽しんで着用すると同様に着物を着用している様子が見られた。逆に着物の経験が少ない着用者は、たとえ日常着として着用していても着物を特別視していることが多い。洋服のおしゃれよりも更におしゃれで、気に入った衣服というような位置づけと考えられる。

着付け、動きにくさ、着物のルールなどは着物が敬遠されている主な理由であるが、着用者の方の多くはこれを苦に感じるというよりはむしろ楽しんでいるようである。着付けに関しては特別に習っていた人とそうでない人に分かれるが、最終的には実践で覚えていくところが大きいようである。着慣れてくればこれらに縛られるのではなく、自分なりの着こなしを見つけ工夫しながら楽しむところが着物の魅力であり、また洋服にはないものでもある。また、ルールのなかで、季節に合わせた組み合わせを積極的に楽しんでいるという事例が多くみられた。それらは「洋服にはないもの」とされており、日常的着物着用者にとっては、着物を着る大きな楽しみの一つとなっているようである。

②友人とのネットワーク

着物をとおした友人づくりを「着物の魅力」として挙げている日常的着物着用者が複数みられた。着物を着て出かけると目立ってしまうため、着付け教室やネット上

で知り合った友人と一緒に出かけることが積極的におこなわれる。また、コーディネートや着こなし、ルールについての相談を友人にできるので心強いとの発言も見られた。このような友人とのネットワークが日常的着物着用を支え、それがまたさらなるネットワークにつながっていくという、循環と発展が見られる。ここでは日常的着物着用が、家庭や仕事以外の人間関係を築くための機能を果たしているのとらえることができる。

③「日本文化」とのかかわり

インタビューのAさん以外は、着物は日本の民族衣装という意識が高く、着物の他にもお茶や日本舞踊などの日本文化に触れている着用者が多い。着物は単なる衣服であるということと同時に日本文化の一つと考え、それらに触れることで自分を高めようという思いが読み取れる。「日本人なのだから着物を着たい」という考え方には、新しいことにチャレンジしようという前向きな姿勢が見られる。

4. おわりに

本研究では日常的に着物を着る着用者が「なぜ着物を着るのか」ということを探ってきたが、日常的着用者はそれぞれに着物の魅力を見出し、着用着用生活を楽しんでいることがわかった。「1. はじめに」で触れた現代の着物の問題点、すなわち価格、販売方法、着付けや手入れのむずかしさに関して、それぞれの着用者は、主に次のように克服していた。まず、価格と販売方法については呉服店と親しくなることや古着店や骨董市、ネットオークションを利用すること。次に、着付けや手入れのむずかしさについては、同じく呉服店と親しくなることや、近所に洗い張りの専門家を見つけること、着付けや手入れの技術を習得した母や祖母の身近にいること、和裁などを習得して自分で技術を身につけることである。とくに古着を着用する場合には、いつでも利用できるメンテナンスの方法を確保することが必須となる。

さらに着物のルールについては、わずらわしいと感じるより、ルールや着付け、所作など着物特有のしきたりを身につけることで自分を高めようとする様子も見られた。「日本人なのだから着物を着たい」という気持ちの裏側には「新しいことに取り組むチャンスなのだから挑戦したい」という意識が見られる。そのチャレンジをともに実現していく友人の存在も重要である。友人のネットワークが、日常的な着物の着用を支えていることも明らかになった。

逆に、インタビューのEさんの証言にあるように、メンテナンスの方法を確保できず、友人のネットワークも築けない場合には、着付け教室に通っても、日常的着用は実現されない結果となる。

また、「日本文化」という点に関しては、着用着物の動機として「伝統的権威」が指摘できる。これは「お茶」

(茶道)に関して、加藤恵津子が指摘していることと同様であると考えられる(加藤 2004, 56-74)。晴着ではなく日常的に、ふだん着の着物を着ることはかつてはほとんどの人がおこなっていたことであり、特別な「伝統文化」ではなかったはずである。ところが、現代社会において着物は日本文化の一つとして、お茶や日本舞踊など他の文化と結びつき、「伝統的権威」を生み出しているのである。日常的着物着用を達成することにより、それが現代社会では希少であることもあいまって、着用者は「伝統的権威」を身につけた人として周囲より一目置かれることになる。それが着用者にとって着物の魅力となっていることは見逃すことができない。

しかし着物の着用に慣れてくるほど、着物を着るといふことが特別なことではなくなり、単なる日常のファッションの一部としてとらえられるようになるようだ。着物を着る以前は洋服でおしゃれを楽しみ、着物に移行した直後には戸惑いや苦勞も見られるが、洋服とはまた違った魅力を見つけ、着物でもおしゃれを楽しもうとする。着物には洋服とは異なる魅力があるが、おしゃれに着こなしたい、美しく見られたいという気持ちは洋服を楽しむ人々と同じであることもまた、明らかになった。

参考文献

- 赤沢節子・南澤奈織美・角尾篤子 (2001) 「『世代間交流』着物と若者」, 『信州大学教育学部附属教育実践センター紀要「教育実践研究」』1号, pp.183-186
- 大橋歩 (1994) 『着物は楽しい』文化出版局
- 加藤恵津子 (2004) 『“お茶”はなぜ女のものになったか—茶道から見る戦後の家族』紀伊国屋書店
- 河村まち子・今井温子・大野慈枝 (2001) 「女子大生の和服に対する認識について」, 『共立女子大学家政学部紀要』47号, pp.39-49
- 川口智子, 石橋葉子 (1986) 「“きもの”に対する意識と行動—女子短大生とその母親—」『中村学園研究紀要』18号 pp.209-219
- 北村富巳子 (2004) 「現代きもの古着考—リサイクルきものブームの実態と考察」, 『生活文化史』45号, pp.55-63
- 北村富巳子 (2005) 「『きものは今』二〇〇〇人調査」, 『生活文化史』48号, pp.32-40
- 全日本きもの振興会 (2007) 「平成19年きもの市場調査」『月刊そめとおり』5月号, pp.78-81, 6月号, pp.77-80
- 通崎睦美 (2002) 『天使突き抜け一丁目』淡交社
- 永田萌 (1993) 『京都・着物暮らし』河出書房新社
- 林真理子 (1992) 『着物の悦び』新潮社
- 森理恵 (2002) 「『キモノ美人』成立過程についての研究—「日本美術史(染織史)」の形成と日本画, 和装界の動向—」, 『イメージ&ジェンダー』3号, pp.76-95

¹本研究では「着物」の語を、現代日本で一般に着用されている和服、すなわち、長着と帯を組み合わせ着る服装の衣服を指して用いる。